彫刻との対話
The dialogue with my sculpture

知足美加子
TOMOTARI Mikako

「子守り唄」樟
113×100×75(cm)
2003年

■「子守り唄」

「触れる」ことほど、実在感を感じさせるものはないかもしれない。この作品は、鑑賞者に触れてもらうことを前提に制作したものである。

一昨年に妊娠、出産を経験したことで、制作に対する感覚が以前とは違ってきたようだ。妊娠中は五感が鋭敏になり疲労しやすかった。木彫の香りと質感は当時の心身に落ち着きをもたらしてくれた。この経験から、心に安定をもたらす木彫を産後は作ってみたいと思うようになった。緊張の強い妊婦・産褥婦の方々に触ってもらうことを念頭に制作に取り組んだ。

木の重量感・存在感を失わないよう内刳り（中を空洞にし割れを防ぐ）はあえてしなかった。背中から腕にかけてひとつの「円」に動勢を集約している。肩、膝など鑑賞者の手がかかる位置はなめらかな曲面になるよう鑿をいれた。

構図を三角形にまとめることで安定感に配慮している。足を交差させる姿勢は量感を強め、包み包まれる感覚を導き出すことを意図している。胎児であり、何かを抱く存在でもあることを象徴した。

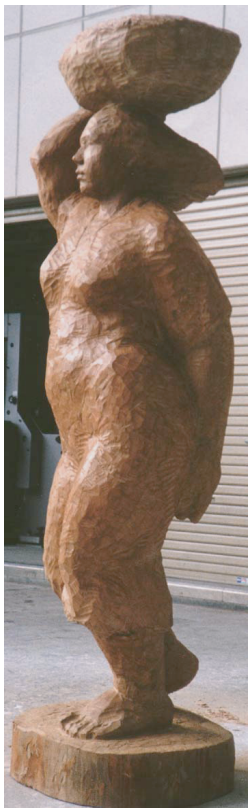
制作中も母乳育児を続けたため、産後の不調と重なり、肉体的にも時間的にも困難な制作となった。またイラク戦争が起こり心を痛めたが、このような時こそ、次世代への願いを形にするべきだと考えた。完成後、妊婦の方はもちろん子供たちにも触ってもらって作品も喜んでいるようだ。

/2003年国展（東京都美術館）
/突展（福岡市美術館）
/春日助産院寄贈

■　「対馬」

対馬産の樟ということから発想した作品。大らかな海風を受けてきた記憶を素材に感じた。木の大きさを活かし、堂々とした存在感をそのまま表現した。

実際に対馬に足を運んだ際、拾った樟の種が自宅で芽吹いた。4年後その苗木を対馬に植樹に行った。「樹の時間」について深く感じさせてくれた木彫である。　/1996年国展



「対馬」樟
230×80×70(cm)
1996年

「稲佐」樟
243×86×76(cm)
1997年

■「稲佐」

この作品は奈良の唐招提寺にある如来形立像(頭部・両手は破損している)に感銘をうけて制作したものである。ミロのビーナスのように、失った部分はむしろ鑑賞者が自らの想像力を介入する余地を残してくれる。特に「手」は彫刻を説明的にしてしまう傾向があるため、この作品では動勢に不要な部分を省略した。

素材が若々しく素性がよかったのでそれを活かし、緑の稲がまっすぐ伸びるような瑞々しさを表現している。　/1997年国展

「初女さん」樟　83×52×53(cm)　1998年

■「初女さん」

樹の根元は目割れや樹皮の回り込みが多く、木材加工という点からは敬遠されることが多い。この作品はその根元部分を利用して制作している。根と幹の間にあって、樹の重量を長時間支えてきた根元部分には、なにか圧縮された力が宿っている。

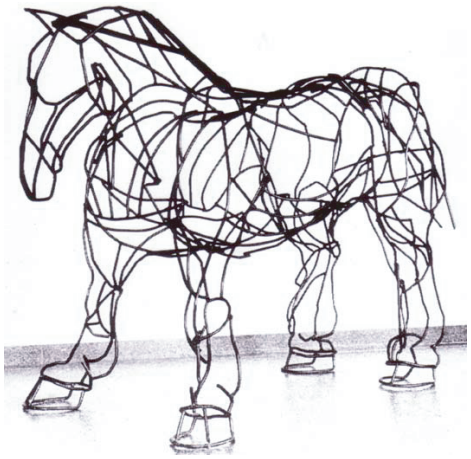
モデルの老女は、岩手県にある「森のイスキア」で料理を通じて人々の心身を治癒する活動を行っている。多くを語らず淡々と料理をつくる彼女の背中に、不思議な慈しみを感じた。樟材の根元部分と彼女の存在が直感的に結びついた。

あたたかい木肌の風合いを活かすよう、必要最小限に鑿をいれている。手の部分は前15cmほどを切り落とし、接ぎ木して彫りなおした。

制作後手元においていたが、訪問者の多くがこの作品によく触っていった。人々が触るおかげで磨かれている仏像の足元を目にすることがある。触覚によって対象との繋がりを確認し、安定を得たいという本能がそうさせるのだろう。木彫「子守り唄」を制作したいと考え始めたのは、この作品がそばにあったからである。

/1998年国展
/2003年台湾・韓国・日本 R.O.C 木彫展（台湾）

■「ばんば」



「ばんば」鉄　145×220×110(cm)1989年

この作品は、1t近い荷物をひく北海道の輓馬がモデルである。幼少の頃から馬が好きで、ただ馬をデッサンしたいという気持ちだけで学生時代に北海道を旅した。旭川の牧場でばんばを描きながら、作るなら素材は鉄しかないと感じた。実在感を、形を解放することによって表現した作品。

■「回想ー二風谷ダム」

「回想ー二風谷ダム」大理石
220×110×65(cm)　1999年

馬の制作から10年たった頃、北海道の二風谷（にぶたに）に違法ダムが建設されたという話を聞いた。アイヌ民族の数名の方がその反対活動をされていた。筆者は「二風谷プロジェクト」を通してこの問題に関わることになった。旭川に滞在して以来、アイヌ民族のことを意識してきたこと。海外青年協力隊で中南米に赴任し、先住民問題を目の当たりにしたことなどが動機だった。

具体的には次のような活動を行った。〇二風谷をテーマにした作品の制作。〇アイヌ民族の方々を講師として招きワークショップを行う。木彫や刺繍、染色の実習。伝統楽器の演奏。二風谷ダムに関する講演会〇ダム横の貝澤耕一氏（ダム裁判原告）所有の土地に作品を設置。作業の協力者をインターネットで募る。台座の制作過程などを現場から日々Webで公開。〇「民族と文化」に関する座談会。（プロジェクトについては以下のアドレスで紹介している）http://www.kyushu-id.ac.jp/~tomotari/nibutani.html

実際にその土地の空気を吸い、人と話し、生活することで、問題に対する想像力はより複雑になる。人を動かす「印」としての在り方を、この作品は示してくれた。　/1999年国展

■「輓馬（ばんば）‘00」

一度輓馬を制作して以来、馬は安易に取り組みたくないモチーフになっていた。

前年から二風谷プロジェクトを通じて民族問題に関わる様々な人々に出会っていた。その万感の思いを形にしたいと考えた時、ふと輓馬のイメージが心に浮かんだ。

斜め上に力強く伸びる動勢とずっしりとした重量感を表現。踏み出そうとする前足を強調した。

/2000年国展

「輓馬‘00」鉄
165×63×275(cm)　2000年

■　民営ディケアサービス施設「このゆびとーまれ」における大理石ワークショップ

「このゆびとーまれ」は高齢者・障害者・乳幼児が利用する民営ディケアサービス施設である。1993年、富山赤十字病院を退職した3人の看護師により開所した。（代表 惣万佳代子氏）年齢や障害で施設を分けない自宅開放型施設である。1997年に県などが全国の自治体にさきがけて補助を出したことから「富山方式」とよばれるようになった。

2002年10月、この施設で大理石の石片を磨くワークショップを行った。

大理石を耐水ペーパーで研磨していく。石のかけらはもともといろんな形がある。これが正しくてこれが間違いという決まりはない。手間をかけるほど、次第に手触りや光沢が美しくなる。自分の行為が即座に「美しさ」として返ってくることを実感できるワークショップである。

作るといっても目標となる形に向かって磨くのではない。単純に作品に愛着の気持ちがわくことを意図している。評価や比較や義務から自由になって創造したもの。それを大切に思うことは、自分自身を尊敬する心に通じる。

「このゆびとーまれ」ワークショップ風景

耐水ペーパーの番数があがっていくことのおもしろさや作業の単純さから、参加者は集中して取り組んでくれた。半年たった今でも、誰かが作品に触れていくという。

ワークショップを行って「このゆびとーまれ」には誰がどんな振る舞いをしても、当たり前のように受け入れてくれる姿勢が根付いていることを強く感じた。すべての人間が違うということを、利用者が生活の中で体感しているからであろう。

それぞれに居場所を与えあうこの「寛容さ」こそ、現代社会に大きな示唆を与えるものである。

■　「石窟庵仏像模刻」

韓国の石窟庵仏像は、無駄な装飾が一切なく、充実した量感と緊張感のある仏像である。この年は妊娠中であったため、大型の作品に取りかかれなかった。そこで依頼されていたこの仏像の模刻制作を引き受けた。もともと好きな仏像であったが、実際に作ることで先人の絶妙な技と感覚を実感し、非常に勉強になった。

「石窟庵仏像模刻」油土
34×27×21(cm)
2001年

■　「空」

一度制作しかけたが、作品にならずしばらく手を付けずにいたものである。育児休暇後、子供をモデルにトルソに作りかえた。

彫刻は「熟成された記憶」が形になる。この頃は、長女の寝顔の記憶がしみ込んでいた。仕事復帰後、子と離れることがかなり不安だったが、この作品を彫っている間だけはそれを忘れることができた。　/2002年福岡県美術協会会員展

「空」樟
102×36×22(cm)
2002年

「海美の風」樟 82×67×57（cm）2004年

/2004年国展（東京都美術館）

■「とも」

実家で飼っているネコである。長女を初めて実家にあずけた時、このネコの存在に助けられた。身近な生き物が、あのときほど神々しく見えた時はない。感謝の気持ちから彫りはじめた。特別な気負いがない自然な始まりであり、それがなぜか嬉しかった。常に自分の中の「本当のこと」を表現することが私の望むところである。それは一見平凡な生活の中にある。これまでもわかっているつもりで、そうではなかったと気づかされた作品。

■「海美の風」

2003年夏、（NPO交響の森から）「神唄祭」というイベントの記念碑として、奄美の流木で彫刻をつくってほしいと依頼された。しかし待っても流木が届かない。設置場所などの問題で話が滞っているのだという。これも何かのご縁だろうと思い、とりあえず樟（くす）で最初の構想を形にすることにした。

奄美の風がもつ受け入れる強さと解き放つ優しさ。次世代の胎動。異質なものを受容することの意味。命の時間軸などのイメージを念頭に制作を始めた。

しばらくして妊娠していることがわかった。つわりの中、大学の業務も多忙で制作を断念しようかとも思ったが、できる範囲で力を尽くした。最後はお腹の子が力を貸してくれたように感じた。今後妊娠中に制作するという経験は一生ないかもしれない。個人的に思い出深い作品となった。

その後自宅出産で第二子を授かった。奄美設置の話は結局まとまらなかった。その頃ちょうど友人の建築家（石井みき氏）が矢山クリニックの新病棟を設計し、完成間近であった。ここは食養や音楽治療、ホメオパシー（西洋の生薬療法）も組み込み幅広く西洋医学以外の治療法を統合した病院である。建物の隅々まで病める人々への愛情に満ちている。この彫刻の香りと手触りが少しでも人を癒してくれれば幸いだと思い、寄贈させていただいた。（2005年6月）

「とも」樟　16×47×35（cm）2003年
第32回県美術協会会員展

農業生産生態学がご専門の中司 敬先生（九州大学農学研究院助教授）とのご縁で、作品を農学部附属農場に設置することとなった。先生は今、農業に「心」という視点をとりいれようと様々な試みをされている。そのひとつが「農業生産の場における芸術体験」である。

農業と芸術に共通するものは、無から有を生みだす「命の創造」である。流通や栄養学などによってとかく数字に換算されることが多い農産物も、深く考えれば場と植物が「生きる力」に人間の手をそえた創造物である。農産物はそれぞれ、天候などの自然の諸条件を形に残しながら月日を重ねる。次世代へ命をつなぐ ー その願いや祈りが集積したものが、米であり野菜であり果実である。

それらのエネルギーを人間は体内に譲り受けることによって、生き延びることができる。つまり命を繋ぐ力を、途中で拝借しているという感じだろうか。このように読みかえると、食品は単純なカロリーや値段ではないことに気づく。食べるということを契機に、自他の命への想像力を大きくおしひろげることができる。

このことを実感として感じるには、どのような経験が必要なのであろうか。まず農業生産の現場に自らの足で立つこと。土に触れること。一粒の種が実を結ぶまで責任をもち、それを食することができれば効果は高い。また重要なのはコンセプトを投げかける「導き」の存在である。食に関するインストラクターやワークショップがより必要性を増すだろう。しかしこれらのことは、農業生産の場に人々の意識が向かなければはじまらない。その手だてのひとつとして、中司先生は芸術の持つ魅力に注目しているのである。芸術のおもしろさや美しさは人々を惹きつける力がある。また新しいものの見方を楽しみながら感じさせることが可能だ。正しさのみでは、人の心の深い部分に届きがたい。

中司先生が農場での美術作品展示に関心をお持ちだと聞き、私の方からいくつかの作品寄贈を申し出た。私の作風は土着的な要素が強いからだ。北海道の輓馬をモチーフにした作品が一番に頭にうかんだ。農業生産の場において芸術を媒介に人々が出会うこと。それを地産地消の食育にまで高めていこうというのが先生のお考えなのだと理解している。

先生や技術職員の方々、学生さんなどのあたたかいお力添えのもと、作品「ばんば」が設置された。（2004年 9月）このころ私は妊娠後期だったので台座の制作などはお任せしてしまった。水田の真ん中に設置するという斬新な構想をお聞きしたときは、農作業のじゃまになったら申し訳ないと思った。しかし産後、写真をいただき感嘆の声をあげた。苗や稲穂に揺れる大地に展示されるということは、どんな人工的空間にも勝る感動を与えてくれる。これ以上ありがたいことはないと感謝した。ここから始まる何かに、心から協力したいと希望している。

寒立馬（かんだちめ）2006年

第80回国画会新人賞受賞/準会員推挙作品

　寒立馬（かんだちめ）は青森県下北半島東通村に生きる野生馬である。過酷な寒さと粗食に耐える強靭な生命力を持つ。雪も吹き飛ばす冷たい海風の中、静かに立っている。その静けさは、こちらの命をひたすら肯定してくれているようだ。ほとんどの馬は、春の出産にむけてお腹の中で寒さから赤ちゃんを守っているという。
　寒立馬は、人間に迎合せず恐れない。寒さの中顔をすり寄せてくる。私自身が育児休暇があけてすぐであったため、何か深い共感を感じる。その強い存在感、あたたかみを作品内で表現しようと試みる。目割れをたてがみの表現に用い、脚の部分は同じ樟を縦割りにして接いでいる。

「Crow」樟　2006年

カラスは町では嫌われ者であるが、古代山岳信仰では太陽神の使いであった。その賢さや漆黒の身体が、畏怖の感情を感じさせるのだろう。私の住んでいるところにも二羽のカラスが住み着いている。朝、バッタリ出会うと、飛び立とうと一瞬緊張している。そのピーンと張りつめた姿に、美しさを感じた。

「空眼」　鉄　2006年

大軍鶏（オオシャモ）の「垂直性」の美しさは、立つ（水平方向から垂直方向へ）という内的体験を与えてくれる。
生物の形を借りて、感情に作用するこの「意志的なもの」を彫刻で表現しようとしている。
闘鶏によって両目を失った軍鶏に出会う。地面を踏みしめる強さと悲哀が、柵越しにあった。
鉄の溶接で形を決め、人工漆と砥の粉で着色している。

「橘の響き」粕屋名産の農産物　268×440×150(cm)　2007年　JA粕屋選果場ふれあい交流館

本作品は九州大学社会連携事業（農業と芸術の協働「食育の基礎から深化へ一植物と対話する音楽」の一環として、粕屋名産の農産物を使ってインスタレーションを作った。会場では「植物の声」から生まれた音楽が、ヴァイオリンと笙によって演奏される。笙は竹林に差し込む「光」を象徴する和楽器という。植物と光、ヴァイオリン・笙の響きをもとに構想を練った。

粕屋名産の柑橘類を、光に見立てて構成している。神道の祝詞に「筑紫の日向の橘（たちばな）のー」という祓いの言葉がある。冬でも常緑の橘（柑橘系樹木）は、古代より「永遠の生命力」のシンボルであった。 植物は「土・水・光」が響きあい調和して生まれるものである。音楽にとっても重要な「調和」をテーマに制作した。作品前の演奏を聴きながら、音も香りも色も味も心も全ては「響き」なのだと思った。食の前に人間が何を想像しなくてはいけないのか、そこを深く考えていきたい。その想像力が感謝と謙虚さの源であり、人間自身が自己肯定するための一歩なのだ。

「触れたかった手に」樟
77×50×40(cm)　第81回国展

この作品は、第二子が生まれた時の形である。自宅の風呂での無介助出産だった。彼は卵膜をかぶって生まれてきた。その中で、子供が彫刻のようなポーズをとっていたのだ。弥勒菩薩のようだなと、思った。卵膜の首下の部分を爪で破り、命が目の前で扉を開けるように生まれてきた。生と死がごっちゃになったような、果てしない静けさを感じた。静けさの中でいつまでも子供を抱いていた。

その後論文の下調べで、明治のハンセン病患者の出産に関する記事を読み慟哭した。新生児は放置死させられたという。出産経験がなかった頃とは、感じ方がまるで違う。その赤ん坊を抱いて、どこまでも逃げ出したくなるようだった。触れることさえできなかったという事の重みは、心身に驚くほど響いた。その後、身近な人や自分の入院が続き、生死への万感の思いを彫刻として作りたくなった。

素材である一本の大きな樟を少しずつ分割して制作した。ひとつは「子守唄」で春日助産院に寄贈(2003年)。ふたつめは「海美の風」。矢山クリニックに寄贈している。(2005年)そして最後の「触れたかった手に」は主人のNPOエスタスカーサに寄贈した。(2007年)

「命の根（稲）」（米、糠、塩、ミカンの葉）　30×320×320(cm)　2007年
JA粕屋　九州大学社会連携事業の一環として

九州大学社会連携事業「芸術文化を取り込んだ先導的な食育と地域農産物のブランド化3」は「お米の地産地消、粕屋米のブランド化」がテーマである。今回は米をテーマに造型表現を行うことになった。

「稲」の語源は「命の根」とする説がある。「一粒も米を無駄にしてはいけない」など、主食である米に対して日本人は深い畏敬の念を抱いてきた。土が稲に姿を変え、命を支え、死によって命は土に帰る。農耕生活は宇宙の運行や天候の変化を身近に感じさせる。その日々の積み重ねの中で命を生み出す天地と稲の営みは神格化されてきたのである。再生を繰り返す自然界の命の営みを「稲（命の根）」に象徴させて作品化した。

環境問題が深刻化する中、社会的側面での様々な取組がなされようとしている。「食」への意識は、環境問題も含め世界の社会動向を左右するほど重要なものとなっていくだろう。その局面を前に、まず私たちが取り戻さなければならないものは、風土と生活に密着した神聖なる精神空間ではないだろうか。この造形表現は、その問いかけである。

地球温暖化と世界貧困の問題は、私たちの食への意識が作り出しているといっても過言ではない。債務の悪循環による南北問題、たった一本の国境線を越えただけで運輸費が非課税になるというグローバリゼーションの愚行など、利己主義と物質中心主義原因である。地産地消、自分たちの環境・風土を守り愛することは、これからの地球における常識になるだろう。次世代が生き延びるためである。根本的に社会を変えるのは政治ではない。今自分が何を必要とし食べるかという「生活上の選択」の蓄積なのである。

この作品は、金剛会曼荼羅（成身会）と八色和幣を主に参考にしている。また五大思想を元に、米・ヌカを「地」、塩を「水」、バラを「火」、葉を「風」、御幣の回転を「空」にみたてている。大きな円周と中心円の幣の向きを変えている。外周を衆生から天へ、中心は天から衆生への動きである。私にとって命の循環、宇宙の運行そのものが神の現れである。自然への畏敬の念を途切れさせてはならない。その理法を人為でとめてはいけない。こういった祈りを作品にこめている。

展示会場では藤枝守氏作曲による「植物の声」としての音楽が、琴によって演奏された。

「土に伏して」樟
97×188×65(cm)
第82回国展
エミール保育園寄贈

インドネシアで象に乗ってから、岩のような象の背中の質感が強烈にこびりついていた。その後、径が1mほどある樟と縁があった。その大きさ豊かさが、以前から頭にあった象の形と結びついた。子供達が木に触れ安心感を得てほしいと考え、作品は保育園に寄贈することに。大地への敬愛と人の心の安定を祈念して制作したものである。

「ダ・ヴィンチの素描の立体化」石膏12×35×16(cm)　2008年　特別展示会「万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチの世界へようこそ」

九州大学附属図書館の依頼でダ・ヴィンチの手の素描を、石膏とウレタンで立体化した。実際作ってみてダ・ヴィンチのデッサンはやはり一流だと思った。上手に芸術的嘘をついている。（よりそれらしくみせている）写真よりダビンチのデッサンを見た方が作りやすい。彼が内的に形をつかみ取っているので、成形が楽なのだ。貴重な体験をさせてもらった。

「未来につづく道　一土を感じて歩こう」
木製キューブ、鉄　30×10×3000(cm)　2008年　ハーブガーデン・プティール倶楽部

九州大学・現代GP「地域環境・農業活用による大学教育の活性化」の一環としてアート・プロジェクトを行った。これは地域の人々と関わり風土を慈しむ心を養う学生教育プログラムである。

木製のキューブを各自彩色し設置する。（上面は今、東面は未来、西面は過去、北面は先祖、南面は次世代イメージ）このワークショップは彫刻の鑑賞教育も兼ねている。参加者は時空間の中で「ここにいる今の自分」を確かめる。「精神的なつながりが、モノや環境との間に生まれること」そのことが、環境問題を考える上での第一歩である。かけがえのない場とそれを慈しむ意識が、世界の隅々まで広がってほしい、そう祈っている。